

# 『健康高齢者実習』プログラムに高齢者疑似体験を 組み入れた学習効果（第2報）

— 高齢者の活動性・自立性のイメージに焦点をあてて —

藤巻 尚美<sup>1)</sup> 流石ゆり子<sup>1)</sup> 牛田 貴子<sup>2)</sup>

## 要 旨

『健康高齢者実習』プログラムに高齢者疑似体験を組み入れた実習が、看護学生の高齢者イメージにどんな変化をもたらすのか、活動性・自立性に焦点を当てて評価した。49名の学生に無記名自記式質問紙調査を、実習開始前、実習中間（高齢者活動に参加後で疑似体験は未実施の状態）、実習終了後に実施した。その結果①「生産的」「忙しい」は実習進度とともに増加した。②「遅い」「鈍い」「依存的」は、実習開始前—実習中間では有意に減少し、実習中間—実習終了後では変化が見られなかった。③高齢者イメージは同居経験の有無での影響はみられず、実習進度による影響がみられた。以上より、学生は、自分の目で見た高齢者をありのままに捉えながらも、高齢者が体験している身体・心理・社会的な加齢変化も理解してきたことが確認された。また、実習での高齢者との接触やカンファレンスでの学びが、学生の高齢者イメージに影響を与えることが示唆された。

キーワード：健康高齢者実習、高齢者疑似体験、高齢者イメージ、活動性、自立性

## I. はじめに

我が国は高齢社会を迎えているにもかかわらず、三世代世帯は減少、核家族世帯は増加傾向にあり<sup>1)</sup>、高齢者と家庭で接する機会が減っている。このため、現代の日本人の高齢者イメージは否定的であり<sup>2)</sup>、看護学生においては、看護を必要とする高齢者と触れる実習で、その否定的イメージが強化される可能性が指摘されている<sup>3)</sup>。保健・医療・福祉サービス提供者の、高齢者に対する否定的イメージは、サービスの質の低下をもたらす可能性があり<sup>3)</sup>、老年看護学教育の上で、学生の高齢者イメージを把握し、どのようなアプローチをしていくかを考えることは重要課題である。本学では、高齢者を否定的イメージだけで捉えるのではなく、高齢者のありのままの姿を捉える教育として、地域での高齢者活動に参加する体験と、高齢者疑似体験

の両方を組み合わせた『健康高齢者実習』を、2年次後期に実施している。著者らは、その教育効果について、学生の実習最終レポートや、色と年齢のイメージ変化から分析し、多彩な高齢者活動メニューと学内での高齢者疑似体験およびカンファレンスを関連づけた実習は、高齢者に対する多彩な見方を育成し、高齢者理解を深める効果があることを報告してきた<sup>4) 5)</sup>。高齢者イメージを構成する因子の一つに、活動性・自立性のイメージがある<sup>6)</sup>。『健康高齢者実習』では、地域で活動する健康な高齢者を対象としているため、高齢者イメージを構成する因子の中から、「高齢者の活動性・自立性イメージ」に焦点をあてて、学生が抱く高齢者イメージの変化を確認することも教育の評価を行う上で有用であろう。高齢者イメージの測定は、SD法を用いた研究<sup>6) 7) 8)</sup>がいくつかみられる。SD

(所 属)

1) 山梨県立大学看護学部

2) 信州大学医学部保健学科

(専攻分野)

老年看護学

老年看護学



表1 高齢者疑似体験の各体験カードの一例

喪失体験	獲得体験	介護に至る体験
<p>今日は免許更新のため免許センターに来ています。あなたにとって車は大切な“足”です。</p> <p>①免許証を見ながら、申込用紙に記入をします。</p> <p>②係員は「もう歳で、視力が悪いから更新できないよ。」と事務仕事をしながら、さらっと言います。</p> <p>③一緒に来ていた家族は、「もうあきらめなよ。」「いい加減家にいてくれよ。」「交通事故を起こしたらどうするの?」「別に車で出かける用事なんてないでしょ。」と言います。</p> <p>④自己イメージ・役割カードを各1枚失います。</p>	<p>曾孫が誕生しました。</p> <p>①孫は「子育ての相談に乗ってね。」「オムツは…」「母乳は…」「夜泣きは…」など相談します。</p> <p>②「おむつは～したほうがいいよ。」「私も時々みてあげるよ。」などアドバイスします。</p> <p>③孫は「さすがだね。」「頼りになるな。」「ほんと安心した。」など感心します。</p> <p>④自己イメージカード・役割カードを各1枚得ます。</p>	<p>配偶者の死をきっかけに一人暮らしを始めました。最近、何もする気にはなれません。心配した家族は、勝手に施設入所の手続きを済ませ、1週間後に入所することになりました。</p> <p>①家族は呆けたと思います。本人に「手続きを済ませたので、来週からホームへ行ってもらいます。病院と同じよ。」とケロっと言います。「1人では心配だし…」「お母さん(お父さん)のためなのよ。」「お友達がたくさん出来るわよ。」など説得します。</p> <p>②「呆けてないよ。」「1人で大丈夫。」「自分の家が一番いいよ。」といくら自分の気持ちを言っても聞き入れてくれません。</p> <p>③住居カード・役割カード・自己イメージカードを各1枚、所有物カードを2枚失います。</p>
<p>孫の服のボタンが取れかかっています。</p> <p>①孫は「ばあちゃん、ボタンが取れそうだから縫って…」と言います。</p> <p>②針に糸を通してください。</p> <p>③孫は「ねえまだ。」「それを着て遊びに行きたいけど…」「まだできないの?」「あとでお母さんに付けてもらうからいいよ。」などと言ひ、服をもぎ取ります。</p> <p>④自己イメージカードを1枚失います。</p>	<p>「昔の遊びを教えてもらおう」という小学校の授業に講師として招かれました。</p> <p>①「これはね。このようにして遊ぶんだよ。」と剣玉をみんなの前で披露します</p> <p>②小学生は、「先生すごいや。」「上手だな。」「こんなこと出来ないよ。」「教えてください。」などと言います。</p> <p>③自己イメージカードを1枚得ます。</p>	<p>関節リウマチのため、歩くにもふらつきがあります。転んでしまったら、骨折の危険もあります。</p> <p>①介助者は、「あなたのためなのよ。」「1人で歩いて転んだら、大変なのよ。」「骨折したら、入院しなければならなくなるのよ。」など抑制の必要性を説明します</p> <p>②転倒を防止するため、車イスにY字抑制されます。</p> <p>③役割カード・自己イメージカードを各1枚失います。</p>

レーションゲームの形で自立している高齢者と要介護高齢者の体験を行う。詳細は以下のとおりである。

まず、80歳の高齢者となった自分の高齢者像を描く。80歳の時に、呼ばれた名前・住みたい場所と住居形態・していきたい職業や役割立場・持っていた大切な所有物(3つ)・自分のありたい高齢者イメージ(5つ)を、用意された自己イメージカードに書き、各々のカードを胸から下げたボードに貼る。このように、自己概念の一部を自ら自覚し、他者に公開することから始める。

次に、老年期におこりうる体験に基づいて書かれたカードを引き、その内容によって高齢者疑似体験を行う。このカードは喪失体験・獲得体験・介護に至る体験の3種類からなる。

喪失体験では、高齢者に特有な身体障害(視力・聴力障害、巧緻性の低下など)をもちながら生活するなかでの困難さを自覚するような体験を行い、指示された自己イメージカードを何枚か失う。獲得体験では、高齢者が培ってきた経験を生かすことで、役割意識を実感するような体験を行い、喪失体験で失った自己イメージカードを再度獲得する。介護に至る体験では、周囲の威圧的な態度の中で、自己決定権の縮小が余儀なくされる体験をし、自己イメージカードを失う。それぞれの体験内容の例を表1に示す。(表1)

学生は4人ずつのグループに分かれて体験順序を決定する。高齢者役の学生は、残りの3人の学生の介助のもとで高齢者疑似体験装具を装着し、高齢者になりきる。各グループ、

高齢者役が1人、残りの3人が介助者・家族役となり、喪失体験・獲得体験・介護に至る体験の順番で体験を行う。カードに書かれた状況設定で、学生はそれぞれの役になりきり、指示された疑似体験を行う。

### 3) 中間カンファレンス

学生は疑似体験により実感した、加齢に伴う身体変化とそれに伴う心理・社会的変化をグループで共有し、老年期に起こりうる変化について考察する。この考察を踏まえ、実習前半での高齢者諸活動への参加体験をふり返り、加齢変化とそれへの適応や、老いへの受け止め方などについて考察する。

### 4) 疑似体験での実感を踏まえて、再び地域での高齢者活動に参加

疑似体験による加齢変化の実感を踏まえて、高齢者と関わることで、加齢変化と老いへの受け止め方・適応などをより深く理解する。

## IV. 研究方法

### 1. 調査対象者

健康高齢者実習を履修している本学看護学科2年次生で、調査の趣旨を理解し、研究参加への同意の得られた49名を対象とした。

### 2. 調査期間

調査期間は2005年11月7日～11月18日である。

### 3. 調査方法

無記名の自記式質問紙調査を3回実施した。1回目は実習開始前に、2回目は実習中間（高齢者諸活動に2日間参加し、疑似体験は未実施の状態）、3回目は実習終了後である。いずれも、調査票はその場で配付・回収を行った。（図1参照）なお、いずれの調査も回答所要時間は2～3分程度である。

## 4. 調査内容

### 1) 高齢者イメージに影響する個人的要因

高齢者イメージに影響する個人的要因とし、祖父母との同居経験の有無、同居の祖父母・別居祖父母・祖父母以外の高齢者との接触頻度について調査した。なお、接触頻度については「かなりある」～「全くない」の5段階評定で調査した。

### 2) 高齢者イメージについて

本研究では、高齢者イメージの測定は、保坂ら<sup>9)</sup>のSD法によるスケールの中から、高齢者イメージを構成する因子の一つである「活動性・自立性」の部分を取り出し、相反する意味の対語となる形容詞を一つひとつ独立させ、それぞれについて、「非常にそう思う：5点」～「全くそう思わない：1点」の5段階評定で高齢者イメージを調査した。「速い」「鋭い」「たくましい」など11の肯定的な意味の形容詞と、これらと対になる「遅い」「鈍い」「弱々しい」など11の否定的意味の形容詞に対し、それぞれ得点が高いほど、肯定的・否定的それぞれのイメージが強いことを表す。肯定的・否定的な形容詞群各11項目の総得点（最低11、最高55）を求めて、高齢者の活動性・自立性の肯定的イメージ・否定的イメージの得点とした。

## 5. 分析方法

高齢者イメージに影響する個人的要因について基本統計量の算出を行った。肯定的・否定的イメージの総得点それぞれについて、基本統計量の算出を行った。また、Kolmogorov-Smirnov法にて正規性を検定した。実習進度による両イメージの平均値の変化については反復測定による一元配置分散分析（多重比較はBonferroni）を行った。形容詞ごとの実習進度による変化については、フリードマン検定（下位検定はScheffeの追比較）を行った。さらに、イメージの変化に対する群間比較として、同居経験と実習進度を要因とする反復測定の二元配置分散分析を用いて差の検定を行った。なお、

全ての分析は統計パッケージExcel統計2004 for Windowsを用いた。

## 6. 倫理的配慮

学生には実習開始前に書面および口頭で、研究の趣旨説明および協力依頼を行った。各調査前には学生に対し、研究への参加は任意であること個人の成績などへの影響はないこと、調査内容は統計的に処理することなどをその都度伝え、研究参加への同意の得られた学生に対してのみ、無記名自記式質問紙調査を実施した。また、匿名性が保持できるよう、質問項目には学籍番号・性別・年齢などは含めず、各調査時点のマッチングは携帯電話番号の下4桁を記入してもらうことで行った。

## V. 結果

### 1. 高齢者イメージに影響する個人的要因

有効回答46名、有効回収率93.9%であった。分析対象46名中、祖父母との同居経験ありは22名(47.8%)、なしは24名(52.2%)であり、平均同居年数は $16.1 \pm 5.5$ 年、範囲は2~20年であった。同居経験のある22名に、同居祖父母との接触頻度をたずねたところ、17名(77.3%)が、「かなりある」「どちらかというところ」としており、「どちらともいえない」が1名(4.5%)、「どちらかというところない」「ない」とした者は4名(18.2%)であった。別居祖父母との接触頻度は、46名中27名(58.7%)が「かなりある」「どちらかというところ」としており、「どちらともいえない」は7名(15.2%)、「どちらかというところない」「ない」とした者は12名(26.1%)であった。祖父母以外の高齢者については、46名中6名(13.0%)が「かなりある」「どちらかというところ」としており、「どちらともいえない」は8名(17.4%)、「どちらかというところない」「ない」は32名(69.6%)であった。

### 2. 実習進度による高齢者イメージの変化

#### 1) 肯定的・否定的イメージの変化

Kolmogorov-Smirnovの検定を行ったと

ころ、肯定的イメージ・否定的イメージの総得点はともに、正規性があると判断された。

肯定的イメージの平均値を実習進度で比較すると、実習開始前は $28.7 \pm 5.7$ 、実習中間は $37.9 \pm 5.2$ 、実習終了後は $40.3 \pm 5.9$ であり、実習開始前に比べ、実習中間・実習終了後では有意に得点が上がっていた。同様に、否定的イメージの平均値を比較すると、実習開始前は $36.0 \pm 5.4$ 、実習中間は $26.7 \pm 3.7$ 、実習終了後は $24.7 \pm 4.5$ であり、実習開始前に比べ、実習中間・実習終了後では有意に得点が下がっていた(表2)。

#### 2) 形容詞ごとの変化

肯定的イメージ11項目、否定的イメージ11項目の形容詞ごとに実習進度による変化をみると、全ての形容詞において、実習開始前-実習終了後間で有意な差があり、肯定的イメージは増加、否定的イメージは低下していた。実習開始前-実習中間間では、「大きい」を除いた全ての形容詞で有意な差がみられた。実習中間-実習終了後間でも有意差が見られたのは、「暇」「忙しい」「非生産的」「生産的」であった(表3)。

### 3. 同居経験と実習進度を要因とする高齢者イメージの変化

反復測定二元配置分散分析を行った結果、肯定的・否定的イメージとも、同居経験による主効果は確認されず、実習進度の主効果が検出され、実習進度×同居経験の交互作用は確認されなかった(表4)。「同居経験あり」「同居なし」とともに、肯定的イメージ得点は実習進度とともに上がり、否定的イメージ得点は下がっていった(表5)。

## VI. 考察

### 1. 実習進度による高齢者イメージの変化

得点化した肯定的及び否定的イメージの実習進度での変化を見ると、学生は、本実習で健康な高齢者と接することで、高齢者に対し、より肯定的なイメージをもつようになったことがわ

表2 実習進度による肯定的・否定的イメージ平均値の変化

	肯定的イメージ			否定的イメージ		
	実習開始前	実習中間	実習終了後	実習開始前	実習中間	実習終了後
平均値	28.7	37.9	40.3	36.0	26.7	24.7
標準偏差	5.7	5.2	5.9	5.4	3.7	4.5

一元配置分散分析, 多重比較は Bonferroni \*\* : 1%有意 \* : 5%有意

表3 実習進度による形容詞ごとの変化

	平均順位			フリードマン検定 p値	下位検定 (Scheffeの追比較)			
	実習開始前	実習中間	実習終了後		実習開始前 - 実習中間	実習開始前 - 実習終了後	実習中間 - 実習終了後	
肯定的イメージ	生産的	1.3	2.1	2.6	0.00 **	**	**	*
	速い	1.3	2.4	2.3	0.00 **	**	**	
	動的	1.2	2.3	2.5	0.00 **	**	**	
	鋭い	1.6	2.1	2.3	0.01 **	*	**	
	たくましい	1.3	2.3	2.3	0.00 **	**	**	
	能動的	1.6	2.1	2.3	0.01 **	**	**	
	忙しい	1.3	2.1	2.6	0.00 **	**	**	*
	自立的	1.5	2.1	2.3	0.00 **	**	**	
	大きい	1.6	2.0	2.3	0.00 **		**	
	進歩的	1.3	2.2	2.5	0.00 **	**	**	
否定的イメージ	強い	1.5	2.1	2.4	0.00 **	**	**	
	非生産的	2.6	1.9	1.4	0.00 **	**	**	*
	遅い	2.7	1.7	1.6	0.00 **	**	**	
	静的	2.5	1.8	1.7	0.00 **	**	**	
	鈍い	2.4	1.9	1.7	0.01 **	*	**	
	弱々しい	2.6	1.8	1.6	0.00 **	**	**	
	受動的	2.5	1.7	1.8	0.00 **	**	**	
	暇	2.6	2.0	1.5	0.00 **	**	**	*
	依存的	2.4	1.9	1.8	0.01 *	*	**	
	小さい	2.4	1.9	1.7	0.00 **	**	**	
保守的	2.6	1.7	1.7	0.00 **	**	**		
弱い	2.8	1.6	1.6	0.00 **	**	**		

\*\* : 1%有意 \* : 5%有意

表4 同居経験と実習進度を要因とする高齢者イメージの二元配置分散分析結果 (反復測定)

		自由度	F値	p値	
肯定的イメージ	同居経験	1	0.3	0.6	
	実習進度	2	91.9	0.0	**
	実習進度×同居経験	2	1.2	0.3	
否定的イメージ	同居経験	1	2.2	0.1	
	実習進度	2	103.3	0.0	**
	実習進度×同居経験	2	2.3	0.1	

表5 同居経験別の各調査時点における高齢者イメージの平均値

		同居あり (n = 22)	同居なし (n = 24)
肯定的イメージ	実習開始前	27.5 ± 5.9	29.8 ± 5.5
	実習中間	38.1 ± 5.4	37.8 ± 5.2
	実習終了後	40.2 ± 6.0	40.3 ± 6.0
否定的イメージ	実習開始前	37.8 ± 4.9	34.4 ± 5.5
	実習中間	27.1 ± 4.2	26.3 ± 3.3
	実習終了後	24.7 ± 4.9	24.8 ± 4.4

かる。本調査の対象者は、高齢者との同居経験がない学生が半数以上であり、祖父母以外との高齢者との接触頻度も「ない」としている学生が6割を越えていた。大谷ら<sup>9)</sup>は、学生の祖父母以外の高齢者に対するイメージはステレオタイプなネガティブなものとなることを報告しており、奥野ら<sup>10)</sup>は、看護学生においては、高齢者を看護ケアの対象者として捉えているため、一般学生よりも否定的イメージを抱く傾向があると報告している。実習により学生の高齢者イメージが肯定的に変化したのは、実習開始前にステレオタイプで看護ケアの対象となる高齢者イメージを抱いていた学生が、実習で健康な高齢者と接することで、高齢者のイメージを捉え直した結果と考えられる。一方、形容詞一つひとつの変化をみると、「生産的」「忙しい」という形容詞は、実習進度とともに増加しているが、「遅い」「鈍い」「依存的」など、一般的に加齢に伴う心身の変化をあらわす形容詞は、実習開始前－実習中間では有意に減少しているものの、実習中間－実習終了後間では有意な変化は見られなかった。実際の高齢者活動への参加場面では、写真部・コーラス部・ダンス部など、高齢者が文化・スポーツなど各方面で、多くの作品を生み出している様子や、一人の高齢者がいくつものクラブに掛け持ちで参加している様子などを、学生は目の当たりにしており、これが「生産的」「忙しい」という形容詞が、実習進度とともに増加した原因と考えられる。また、学生は実習の中間で、疑似体験により身体面の変化を、疑似体験装具を着用した状態で様々な日常生活動作を実施することで機能面の変化を体験し、これに伴う心理面・社会面の変化も実感し、中間カンファレンスでこれらの加齢変化の実感を振り返り考察している。「遅い」「鈍い」「依存的」などの、加齢に伴う心身の変化として挙げられる形容詞が、実習中間－実習終了後間で有意な変化が見られなかったのは、実習中間で行う疑似体験及び中間カンファレンスでの学びが影響している可能性が考えられる。著者らが行った色を用いたイメージ調査<sup>5)</sup>では、活

動的なイメージ色は実習と共に増えるが、静的なイメージ色は、実習中間－実習終了後間では大きな変化はみられておらず、学生が高齢者の活動性だけに焦点を当てていたのではなく、疑似体験による心身の加齢変化の実感を踏まえて対象を捉えていたことが明らかになっている。本結果でも、高齢者イメージが実習進度とともに肯定的になる一方で、否定的イメージの形容詞のうち、加齢に伴う心身の変化を表すものは、実習中間－実習終了間では変化がみられなかった。この結果は、学生が疑似体験後に、再度高齢者活動へ参加することで、加齢変化の実感を踏まえながら、実際に諸機能が低下しつつも社会で前向きに活動をしている高齢者の姿を捉えるようになった為と考えられる。健康な高齢者と活動を共にする実習の中間点で疑似体験を行うことは、高齢者に対するプラス面とマイナス面を含んだ多様な見方を育成する機会となることが示唆された。また、本研究では、SD法の様な一方向だけのイメージ調査を補う為に、対語となる形容詞を一つひとつ独立させて多段階評定を行うことで、各形容詞の強度を測定し、肯定的・否定的両方のイメージについて測定した。この方法により、得点化したイメージの変化だけでは明らかにできない、微妙なイメージの変化を明らかにすることができたものと考えられる。

## 2. 同居経験と実習進度による高齢者イメージの変化

本結果では、同居経験と実習進度を要因とする高齢者イメージの変化を分析したところ、同居経験の有無による影響はみられなかった。先行研究でも、同居の有無と高齢者イメージとの関連は見られず<sup>8)</sup>、同居経験は高齢者イメージの規定要因にはなりえないことが報告されており<sup>6)</sup>、本研究でも類似した結果となった。大谷ら<sup>9)</sup>は、単に同居経験がイメージに影響を与えるのではなく、親の高齢者に対する姿勢が直接イメージに影響を及ぼすと報告している。本研究では、親の姿勢までは調査していないが、

学生の高齢者イメージが親の影響を受ける可能性も考えられる。久世<sup>12)</sup>は、価値観の形成過程として最初に親の価値観が子どもに伝わるとしているが、青年の価値観は主体的な形成途上にあるからこそ、おかれている社会状況を敏感に反映し、その価値観に影響する社会的要因として学校教育を挙げている。本結果では、実習進度が学生の高齢者イメージに影響を与えており、実習での家族以外の高齢者との接触や、カンファレンスでの他学生との意見交換が、実習前とは別のイメージを形成するきっかけとなったものと考えられる。様々な個人背景を持つ学生が、高齢者の姿をありのままに捉えられる為に、本実習が重要であることが示唆された。

また、学生の高齢者イメージ形成の主要因として、実際の高齢者との印象に残るような経験が挙げられており<sup>9)</sup>、高齢者との生活体験の少ない学生にとっては、本実習での高齢者との関わりが高齢者イメージの形成に与える影響が大きいことが考えられる。近年、別居志向の高齢層は増えており、今後同居率が現在よりさらに低下することも予想されている<sup>13)</sup>。日常生活で高齢者と触れ合う機会の少ない学生も増加することが考えられるため、このような実習がより重要となることが示唆された。

## VII. 研究の限界

今回の調査は、高齢者イメージを、活動性・自立性に焦点をあてているため、高齢者イメージ全体を捉えるには不十分である。また、親の高齢者に対する姿勢など、イメージに影響を与える個人的要因の全てを調査できていない。調査対象者に関しては、実習履修の関係から対照群を設けることは不可能であり、分析では同一群の経時比較に止まざるを得なかった。さらに、一学年に対する調査であり人数も少ないことから、代表性の点で限界がある。今後は以上の点を改善し、学生の高齢者イメージ全体の変化を、様々な角度から分析し、教育効果について検討していく必要がある。

## 引用・参考文献

- 1) 厚生統計協会：国民衛生の動向 厚生指標, 53, 35-36, 2006.
- 2) Koyano W : Japanese attitudes toward the elderly ; A review of research findings, Journal of Cross-Cultural Gerontology, Vol.4, 335-345, 1989.
- 3) 古谷野亘, 安藤孝敏：新社会老年学 シニアライフのゆくえ, 23, ワールドプランニング, 2003.
- 4) 流石ゆり子, 亀山直子：『健康高齢者実習』の意義—学生の実習終了後レポートの分析による学習内容の検討—, 日本老年看護学会誌, Vol.9(1), 65-75, 2004.
- 5) 藤巻尚美, 流石ゆり子, 牛田貴子：『健康高齢者実習』プログラムに高齢者疑似体験を組み入れた学習効果～高齢者に対する年齢と色のイメージの変化より～, 山梨県立大学看護学部紀要, Vol.9, 35-41, 2007.
- 6) 保坂久美子, 袖井孝子：大学生の老人イメージ—SD法による分析—, 社会老年学, 27巻, 22-33, 1988.
- 7) 古城幸子, 木下香織, 馬本智恵：老年看護学の授業による学生の高齢者イメージの変化 第2報 老年看護学Ⅱ演習の授業評価, 新見公立短期大学紀要, 24巻, 25-33, 2003.
- 8) 大塚邦子, 正野逸子, 日浦瑞枝, 白井由里子：看護学生の老人のイメージに関する研究—SD法によるイメージ評価と描写特徴とを中心—, 日本老年看護学会誌, Vol.10(1), 98-104, 1999.
- 9) 大谷栄子, 松木光子：老人イメージと形成要因に関する調査研究(1) 大学生の老人イメージと生活経験の関連, 日本看護研究学会誌, 18巻4号, 25-37, 1995.
- 10) 奥野茂代：老年看護における高齢者観の再考, 日本老年看護学会誌, Vol.7(1), 5-12, 2002.
- 11) 桑原洋子, 水戸美津子, 飯吉令枝：“老人観”に関する研究の問題, 新潟県立看護短期大学紀要, 第2巻, 47-58, 1997.
- 12) 久世敏雄：変貌する社会と青年の心理, 43-49, 1990.
- 13) 厚生省：厚生白書 新しい高齢者像を求めて—21世紀の高齢社会を迎えるにあたって—, 19-27, 福村出版, 2000.



# Learning Effects of a Practical Training Program of the Healthy Elderly Including Simulated Experiences

## (Part II)

### — The Change of Nursing Student's Images for the Elderly Focus on Activity and Independence —

FUJIMAKI Takami, SASUGA Yuriko, USHIDA Takako

Key words : practical training program of the healthy elderly, simulated experiences, nursing student's images  
of the elderly, activity, independence